



徳山医師会報

2025年（令和7年）

8月号（758号）

目次

NPO法人
「しゅうなんまちなか保健室」について

理事会報告

委員会報告

徳医旬会

絵日記

編集後記

9月の行事予定

25日	25日	24日	22日	22日	16日	8日	3日
戴帽式	産業医研修会	経営会議	周南近郊医師会 事務局協議会	会報校正委員会	病院運営委員会	会報編集委員会	理事会
体育館	研修室	病院会議室	防府	登録医控室	病院会議室	登録医控室	病院会議室

NPO法人「しゅうなんまちなか保健室」について

NPO法人「しゅうなんまちなか保健室」 理事長 小 野 薫

(おのクリニック 院長)

このたび我々の団体をご紹介させて頂ける機会を頂き、誠にありがとうございます（図1）。以下は当法人の設立趣意書です。

団塊の世代が75歳以上になる「2025年問題」、そのジュニア世代の「2040年問題」…日本は空前の高齢化社会、多死社会に突入していきます。そこを乗り越えるために必要とされるのが「地域包括ケアシステム」の構築。要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される仕組みを言います。2000年の介護保険制度の誕生、2005年の地域包括支援センターの設置、2016年から在宅医療介護連携推進事業が開始され、高齢者に向けた支援体制はずいぶん整ってきました。

いわゆる“支える”仕組みは充実してきました。しかし、健康な生活（禁酒・禁煙など）や理想的な医療や介護より、友人がいる人、生きがいがある人の方が長生きであるというデータが示すように、社会とのつながり（社会的関係性）の方が大切だということがわかってきました。つまり、高齢者は身体・認知の機能低下だけでなく、家族、友人、地域との関係性も脆弱となっているのです。これは「木」で言えば「根っこ」にあたり、「根っこ」が細くなった「木」（高齢者）をつっかえ棒ばかりで支えようとしても無理で、「根っこ」が再生する支援、「根っこ」に目を向けた支援が重要です。

社会的関係性の弱さから自立が難しくなっているのは、何も高齢者ばかりではありません。障害者やがん・難病患者、引きこもりやシングルマザーの子

育て家庭も同様の問題を抱えており、「社会的関係性」を育む土台としての「コミュニティの力（地域力）」と、その強化が必要とされるようになりました。このような背景から、今や「地域包括ケアシステムの構築」は、「地域共生社会の実現」に変わってきました。

そのようなことを背景に、我々は今、「暮らしの保健室」というものをつくりたいと考えています。この「暮らしの保健室」とは、訪問看護師である秋山正子さんが、イギリスのがん専門相談支援機関「マギーズ・センター」を参考に、2011年に東京都新宿区に作った場所です。ここは、医療や介護、福祉、がん療養に関することを始め、暮らしの中の困りごとを、医療・介護の専門職種に無料で相談することができる相談支援の場です。相談に来ることで“安心な居場所”となり、孤独でつながりが切れていた人も“つながり”が生まれる。そこで開催される催しに参加して高齢者が「楽しい」気持ちになる、「楽しい」が新たな人を呼び、交流を生み、“通いたい場”となり、元気を生み、支え合いとなり、コミュニティが再生する。今や「暮らしの保健室」は、単なる相談支援だけでなく、まさに「地域包括ケアシステムの構築」から「地域共生社会の実現」の役割を担う場となっています（図2・3）。

多くの共感を得て、全国各地に様々な形の「暮らしの保健室」ができていますが、周南市にはそのような場所はありません。私は2016年より、当時は徳山医師会理事として、周南市の在宅医療介護連携推進事業に関わっています。事業では大きな仕組みづくりはできませんが、個々の相談に対応したり、地域課題を抽出し解決したりすることは難しく、それを日々行うことは到底困難です。

日本財団の「みらいの福祉施設建築プロジェクト」というものがあります。その開催趣旨に「近年、少子高齢化や多様性の尊重、コミュニティの希薄化といった社会背景の変化に伴い、社会福祉施設は多機能化や地域貢献への動きが活発となり、地域福祉を担う拠点としての役割が求められています。(中略)社会福祉施設が、地域社会に開かれた魅力ある場所として認知され、まちづくりの核となっていくためには、建築デザインが重要な要素となってきます。デザインは環境をつくり、環境はサービスやケアと密接に結びついているからです」とあり、我々も地域社会に貢献し、地域社会から愛され、地域福祉の拠点となる施設をめざして、この「暮らしの保健室」をつくりたいと考えています。

2021年3月、医療介護を中心とした有志が集まって頂き、「暮らしの保健室」のあり方を検討してきました。今後はこのプロジェクトをできるだけ多くの人に知って頂き、共感してくれる仲間を集め、意見を聞き、形にしていきたいと思っています。

上記のような思いで周南市のまちなかに「暮らしの保健室」をつくりたいと2021年より活動を始め、2022年4月にNPO法人設立しました。このたび念願の活動拠点を持つことができました。場所は「銀南街ビル」。PH通りの「いよや」のすぐ下です。「マツノ書店」という郷土の歴史書などを中心に扱う古書店があるビルの奥にあります(図4)。当初からまちなかに物件を探していましたが、まちなかですと家賃は高いし、改装費も相当かかります。資金もなく活動実績もない我々には、最初から拠点を持つ

ことは無理な話でした。しかし、このたびはまたまほぼ家賃だけで使用可能な物件を紹介頂き、お借りすることができました(図5)。ここで考えていた事業を行うことで、収益事業をつくり、得られる補助金を増やし、支援を拡げ、持続的に運営できる形をつくりたいと考えています。

まずは第1・3・5水曜日の10時から15時まで、不定期ですが土曜日の14時から16時まで開所し、立ち寄って頂けるようにしております。悩みがある方、誰かと話したい方、まちなかの休憩場所に是非ご案内頂ければ幸いです(図6)。

これからはただ開けているだけでなく、健康教室など市民の皆さんが興味ある企画も行っていけたらと思っています。また、専門職種同士の勉強会なども企画し、一緒にレベルアップできる「部室」のような場所にもなればと思っています。

最後に現在抱える大きな課題が周知方法です。現在はHPやFB、インスタで活動報告・告知をしていますが、高齢の方々や、我々を知らないの方々には、我々の存在や活動予定が周知しにくい状況です。まちなかに「掲示板」のようなものがあればと思いますが、なかなかありません。可能でしたら、会員の先生方の診療所や関連施設にてご案内を頂けたらと考えております。その節はどうぞ宜しくお願い致します(図7)。

このたびは紹介の機会を頂きまして誠にありがとうございました。お近くに来られた際は、是非遊びに来て下さい！また是非、健康講話などもお願いできましたら幸いです。今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。



図1

相談する	くらしの相談窓口 医療、がん、介護、障害の悩みを 医療・介護の専門職種がお聴きします。	学ぶ くらしの学校 医療、介護、障害、暮らしについて 学びの場をつくれます。 専門職種がスキルアップするため、 学びの場をつくれます。
読む考える	まちのライブラリー 医療、介護、暮らし、アートに関する 本が自由に読めます。	一緒に食べる みんなの食堂 孤食が問題なのは子どもだけではなく。 子どもだけでなく、 高齢者も対象にした食堂活動を行い、 多世代交流の場をつくれます。
刺激される	みんなのアート 心の底から笑ったり、素敵なアートで 感性が刺激されることは大切。 ジャンル、プロ・アマ、障害の有無に関わらず、 アートに触れる機会をつくれます。	くつろぐ まちの縁側・リビング 気軽に座って休憩、おしゃべりできる 縁側や居心地のよいリビングをつくれます。

図2

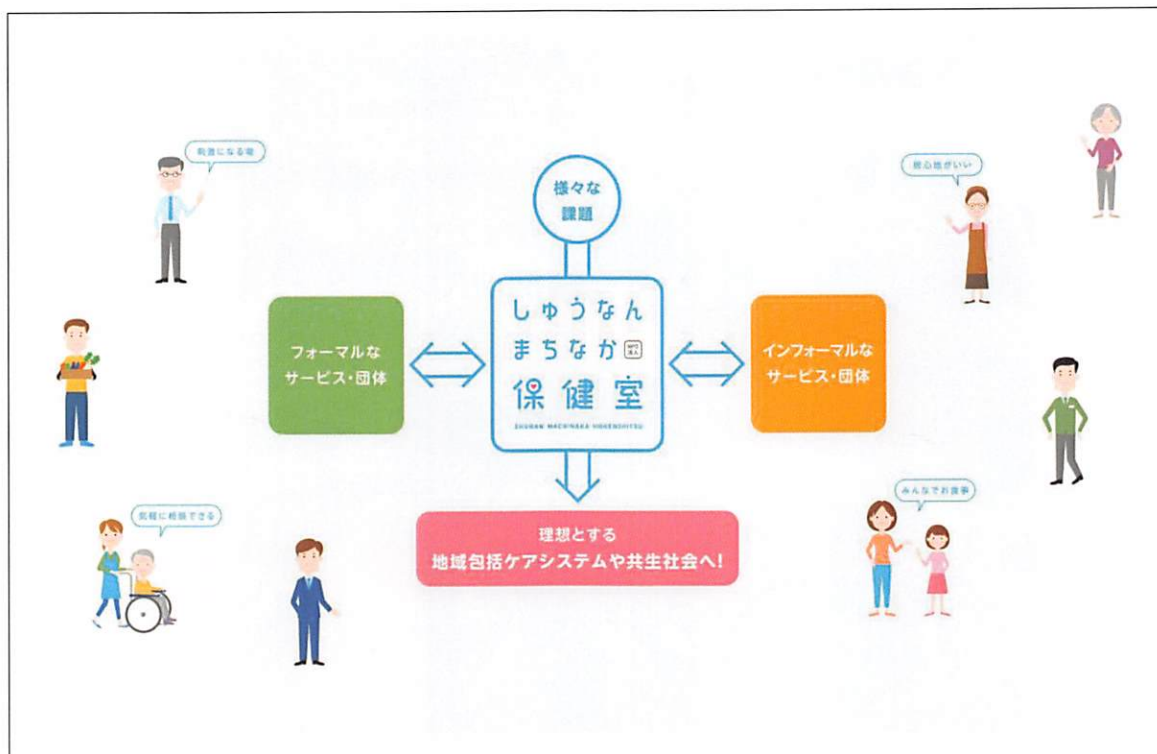


図3



図4



※写真の掲載については許可を頂いております。

図5 オープニングイベント（6月29日）



図6 おでかけえんがわ（8月9日）

ホームページ



Facebook



instagram



図7